

終戦記念日が近づいてきた。毎年この時期になると思い出すことがある。戦争に人生を大きく左右された伯父や伯母、祖父のことだ。

叔父は、太平洋戦争末期、三〇代半ばで「赤紙」が来た。択捉島に配属されて間もなく終戦を迎えた。ソ連軍から日本に向かうと言われて乗った船が到着したのは極東のシベリア。抑留生活の始まりだった。一人また一人と倒れていく仲間たち。収容所周辺の草を食べて空腹をいやした。なんとか日本に帰還し、妻子と再会を果たした。「戦争はいけない」が口癖だった。

伯母は、南洋の戦地に赴いた夫を失い、乳飲み子を含む三人の子供を一人で育て上げた。戦地から届いた遺品は一つの骨片のみ。NHKの朝の連続ドラマ「おしん」が放送されていたころ、叔母はこう言った。「あの時代、みんな、口で言えない苦労をしたんだよ」。再婚の話もあったが、断り続けたという。「天国で、夫が待っているから」と。

祖父は日中戦争に駆り出された。背中には、銃弾の破片が当たったという傷跡があった。子供のころ、戦争のことについて尋ねても多くを語ってくれなかった。人が殺しあう戦争は決して子供に語れぬことだったのだろう。

安倍内閣は七月一日、集団的自衛権の行使を容認する閣議決定を行った。これまで

一線を守れぬ政治家

の憲法九条の解釈を変え、戦後日本の安全保障政策を根本から変質させた。伯父ら三人はいずれも他界したが、今の日本の政治状況をどう見ているだろうか。

◇ ◇ 「政治家には越えてはいけない一線がある。自分が依って立つところはどこかということだ」。十数年前、あるベテラン道議は強調した。会派の同僚が長年争ってきた会派に所属を変えた時のことだ。突然の「変節」は、次期道議選をにらみ、議席を守るためだったとみられる。

今回の閣議決定をめぐり、国会議員たちは一線を守ったのだろうか。

「平和」を党是とする公明党は当初、集団的自衛権の行使容認には反対姿勢を示したものの、安倍晋三首相の強硬姿勢に最後は腰砕けとなった。そもそも腹が座っていたとは言い難い。山口那津男代表は今年一月に「政策的意見の違いだけで、連立離脱とは到底考えられない」と述べた。党是より政権維持が最重要との姿勢が明るみとなり、安倍首相に足元を見透かされた。

自民党内にも慎重姿勢の議員は少なくなかったが、最後は口をつぐむ議員が多かった。野党も「憲法の解釈を変えるなら憲法改正すべきだ」「手続きがおかしい」と批判したが、野党共闘を仕掛ける戦術も、その力がある議員もおらず、抵抗さえ、ほとんどできなかった。

◇ ◇ 地方自治体からは異論が相次いだ。集団的自衛権の行使容認や安倍政権の手法を批判・反対するなどの意見書が一〇〇以上の地方議会でも可決された。自民党や公明党の議員が賛成に回るケースもあった。三重県松阪市の山中光茂市長は、違憲確認を求めて国を提訴する意向を表明するなど、首長からの疑問の声が出た。

道の高橋はるみ知事はどうか。「今後、政府による衆参両議院での説明や、自衛隊法など関係法の改正に伴う国会審議がなされていくものと承知していますが、この問題については、国政場における議論をはじめ国民的議論を尽くすことが何よりも大切であると考えています」。閣議決定の日に発表したコメントだ。賛否が分かれる国政レベルの課題には自らの意思を示さないという、いつもの「はるみ流」。重要な政治課題について、自らのスタンスを明確に主張できないのなら、政治家としての資質を疑われても仕方あるまい。

政治家の劣化に、我々ができることはなにか。やはり選挙しかない。来春には統一地方選を控えている。二年後には参院選もある。集団的自衛権をめぐる政治家たちはどう行動し、どう発言していたのかをしっかりと記憶にとどめたい。口先だけなのか、本当の信念なのか。政治家の真贋を見極めよう。

△洋▽